

## 「引きこもる力」と「信じる力」

青山キャンパスにて

中学生になった娘が、2年間、不登校だった体験がある。

心を病んで、からだに不調が現れた。

いくつもの病院を巡り、カウンセリングも受けた。が、からだの不調は「一生、治らないかもしれない」と医師に言われた。それは、成人となっても自立することはできない可能性を意味した。

母子家庭で、定収はない。

それまで親子心中をする人の気持ちは、とても理解できなかった。が、娘の不登校のさまざまな体験をして、「この子のために、もう自分ができることは何一つない」と無力感にうちひしがれ、絶望したとき、親は心中を考えるのかもしれないと思った。冷静に考えれば、「親がこの子のためにできることは何一つない」ことは決してない。だが、人は追い詰められると、そう思いこんで絶望する。

ハンガリーの詩人が言うように、絶望は希望と同じく虚妄であるのだけど。

引きこもりの子がいる親にとって、「引きこもる力がある」という言葉は救いだろう。

親よりも、ずっとずっとしんどい思いをしている本人にとっては、「引きこもる力がある」という言葉は「ウツソォ！」と思っても、力を与えてくれるだろう。引きこもりの子どもたち（大人たち）は、自信喪失している。「なんで？」と思うほど、自分に自信がない。自分に自信が少しでも持てれば、下を向いていた顔が前を向く。立ち上がる元気が湧くかもしれない。扉を開けて、歩きだそうという気持ちを背中で押してくれるだろう。

枯れているように見える木が、何年も経ってから、花を咲かせることがあると聞いたことがある。何かのきっかけで傷ついた木は、自分を守るために葉を枯らし、力が満ちてくるまで、ひっそりと眠っているだけなのである。

引きこもりの子も同じことだろう。

私たちに必要なのは、その子を、人を、「信じる力」かもしれない。

実は、「信じる」こと、「信じ続ける」こともたいへんなことで、その人に「力」がないとできることではない。

野々村さんは、その力をたくさん持っている方で、それが大勢の人を味方に引き込んで、大きな仕事を成し遂げておられる秘密なのかもしれないと思った。

野々村さんの人柄と、関西弁の魅力をひしひしと感じた授業でもあった。

